

無量光院跡第36次現地説明会資料

平成 29 年 10 月 21 日 午前 11 時～

平泉文化遺産センター

1 はじめに

無量光院跡は、昭和 27 年に文化財保護委員会(現在の文化庁)によって調査が行われました(1次調査)。この調査によって、鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』に「宇治平等院を模す」と記された、無量光院跡の本堂跡が平等院鳳凰堂に似ている事が確認されました。

2 調査要項

| | |
|------|----------------------------|
| 期 間 | 平成 29 年 8 月 1 日～10 月下旬(予定) |
| 目 的 | 復元整備に伴う内容確認調査 |
| 面 積 | 約 160 m ² |
| 調査主体 | 平泉町教育委員会(担当者:鈴木江利子・島原弘征) |

3 調査の概要(10月10日現在)

現在、無量光院跡北側の範囲確認を目的とした調査を行っています。調査の結果、無量光院跡北側を区画する堀跡(36SD1A・B)が見つかりました。この堀跡は無量光院跡造営以前からあった堀跡(36SD1C)を改修して無量光院跡の北端の区画施設として使用していたことが分かりました。

(1) 無量光院跡以前の堀跡(36SD1C)

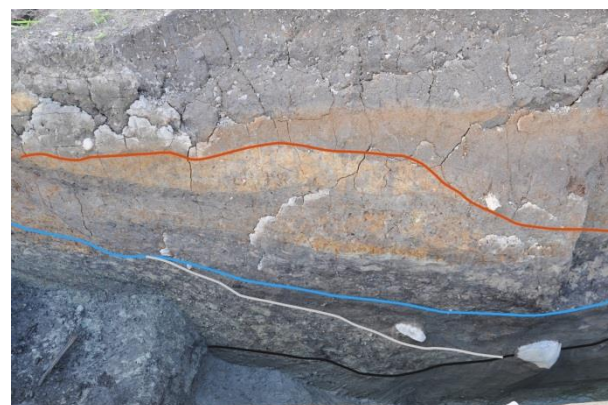
幅 9 m、深さ 2.3m 程の堀跡が見つかりました。無量光院跡造営以前から存在していたと考えられる堀跡です。

底面には自然に堆積した粘土層があり、ここから無量光院跡以前のかわけや扇骨が出土していることから、無量光院造営以前に一定期間使用されていたことが分かります。

この堀は一部盛土を行い無量光院跡の北側を区画する堀跡に作り直されていることが分かりました。

(2) 無量光院跡北側を区画する堀跡

無量光院跡以前から存在していた堀跡を作り直して、お寺の北側を区画する堀跡が作られました。



堀跡 36SD1A～C 断面(一部)

黒線より下が無量光院跡以前の堀跡の自然堆積層、その後白線まで埋め立てて、無量光院跡北東側の堀を作り、一定期間使用後赤線まで埋め立てて、小規模の堀に作り直していた。

この北側を区画する堀跡は新旧 2 時期あることが分かりました。

○古い方の堀(36SD1B)

古い方の堀跡は幅 9 m、深さ 1.5m 程の規模があり、無量光院跡の北西側を区画する堀跡です。この古い堀は新しい堀を造る際に人工的に埋め戻されていましたが、堀の底には自然堆積土があるから、一定期間使われてから作り直しをしたと考えられます。時期は出土したかわらけや陶器から無量光院跡造営時のものと考えられます。

また、埋め戻しの際には、地滑り防止のために枝や植物など敷いた粗朶(そだ)の痕跡がありました。なお、粗朶の痕跡は柳之御所遺跡の堀からも見つっています。

○新しい方の堀(36SD1A)

古い堀を埋め立てた跡地に、幅 2 m、深さ 60～70 cm の堀が造られました。古い堀とは異なり人工的に埋められた痕跡は無く、自然に埋まったようです。時期は 12 世紀と考えられます。何故堀を小規模に作り替えしたのか、その理由については北側に位置する柳之御所遺跡の堀跡と比較検討する必要があります。

(3) 出土遺物

堀跡からはかわらけや国産陶器、中国産磁器、扇骨等が出土しています。



堀跡 36SD1A 断面

4 まとめ

今回の調査では、無量光院跡の北東側を区画する堀跡(36SD1A・B)が見つかりました。この堀は無量光院跡造営以前からあった堀跡(36SD1C)を改修して無量光院跡の北端の区画施設として使用し(36SD1B)、その後小規模に改修していたことが分かりました(36SD1A)。

また、堆積状況及び工法が柳之御所遺跡の堀跡の状況と似ていること、短期間に複数回の改修を行っている事も改めて確認しました。この事は柳之御所遺跡の改修と無量光院跡の造営及び改修が一連の作業として行われている可能性を示唆しています。今回見つかった各堀跡の時期と柳之御所遺跡の改修時期が同一時期なのか検討する必要があります。

最後になりますが、調査にご協力いただきました宗教法人毛越寺様、地域住民の方々、猛暑の中発掘調査に従事していただいた作業員の皆様に感謝申し上げます。また、今年度も無量光院跡の整備工事を行う予定です。今後ともご協力の程、よろしくお願いいたします。

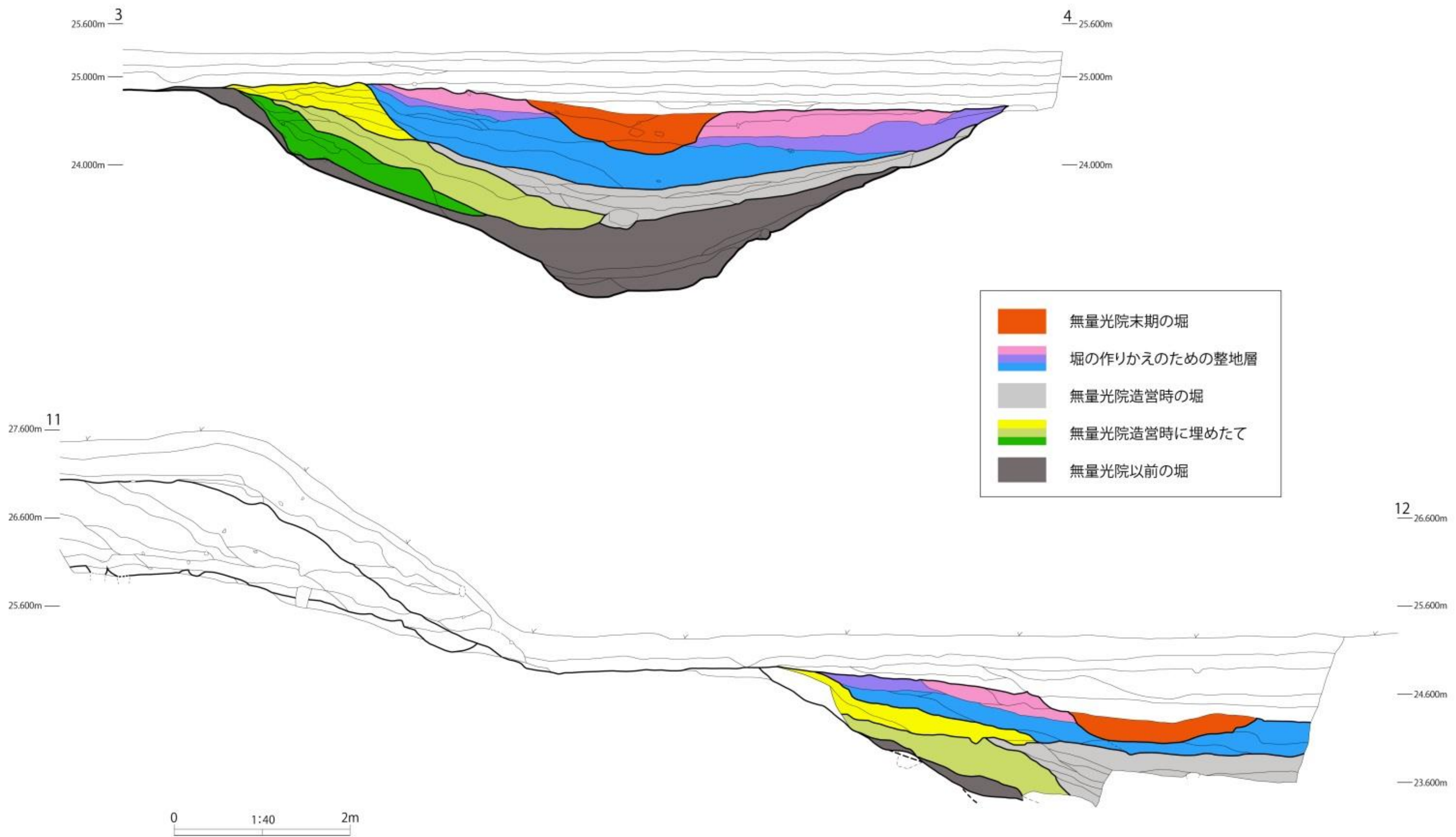


図 1 堀跡断面図

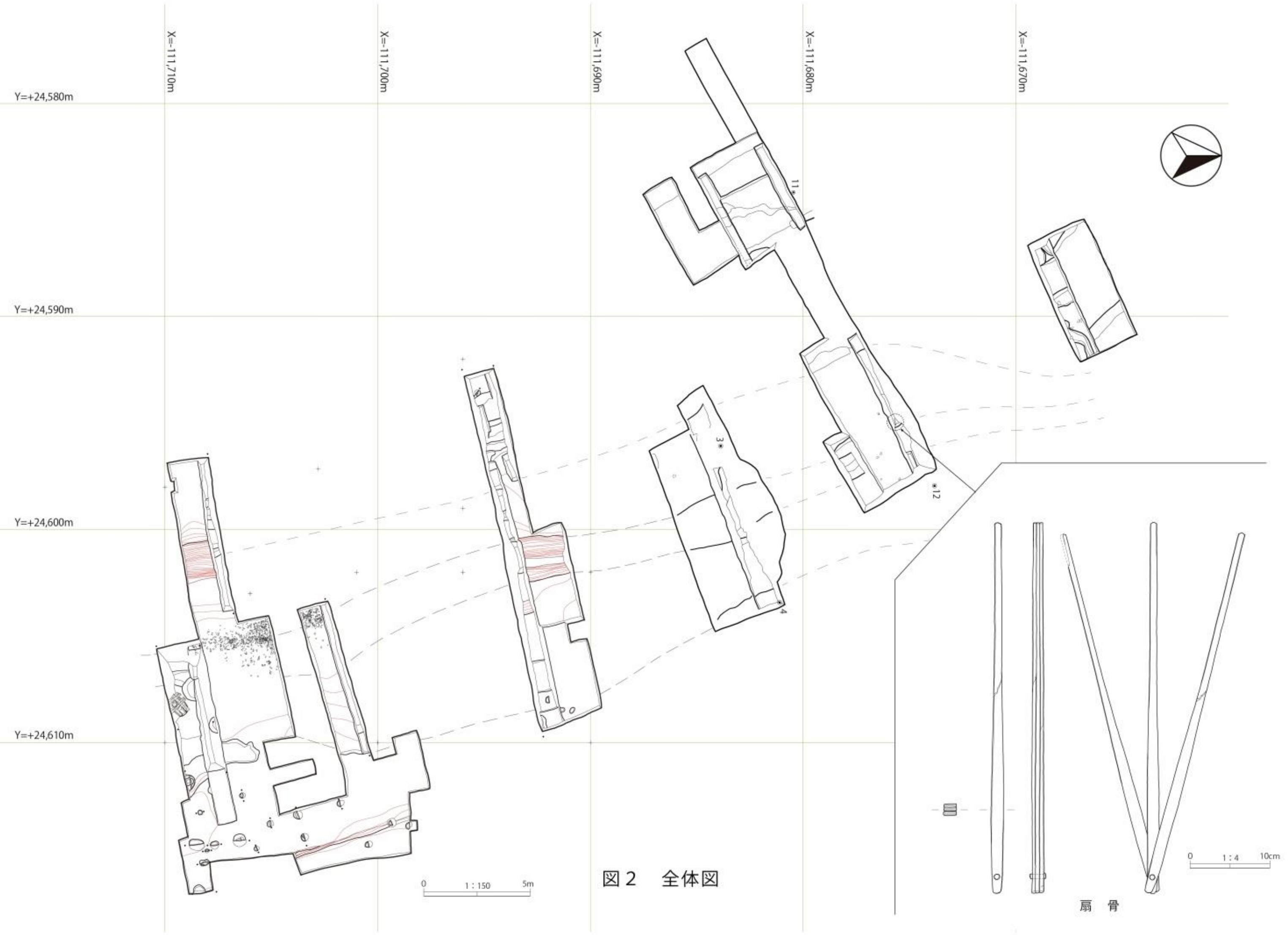
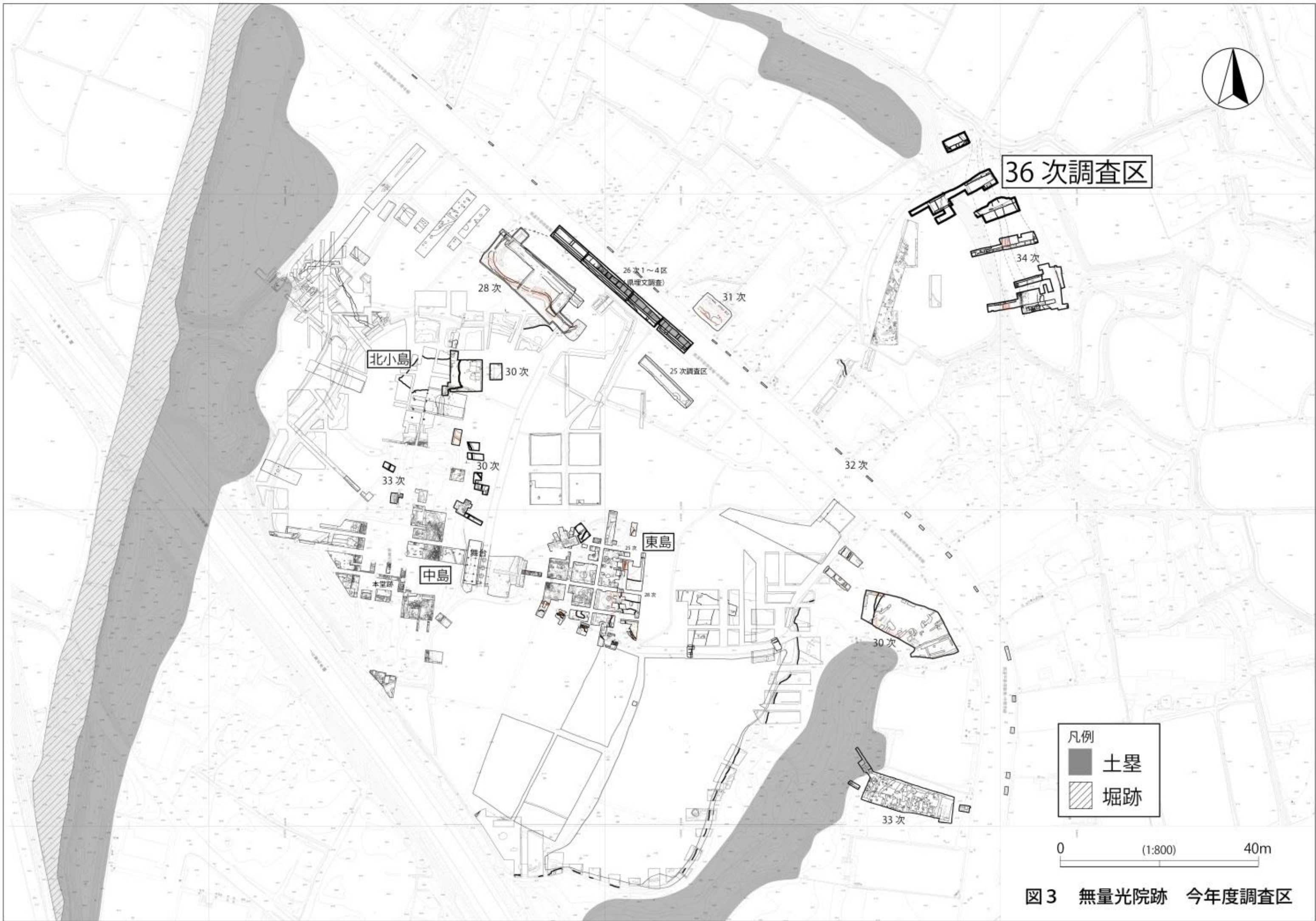


图2 全体图

扇骨



36次調査区

凡例
 ■ 土塁
 ▨ 堀跡

0 (1:800) 40m

图3 無量光院跡 今年度調査区